

が「おめでとう」といって起きる。朝食は元旦らしく雑煮だった。3時に聖沢隊を呼ぶが応答はなかつた。予定通り出発。まだ真暗な樹林帯をヘッドランプをつけて進む。この辺りは二重山稜になつていて、ルートファインディングが難

しい。1ヶ所どうも良く分からなくて僕と杉澤と佐野で捜す。佐野が正しいルートを見つけたが夏道と同じだつた。一度滝みに降りて右の尾根に移ると森林限界だつた。やがて尾根は次第に細くなり、両側がスッパリと切れ、赤石沢と聖沢に落ちている。

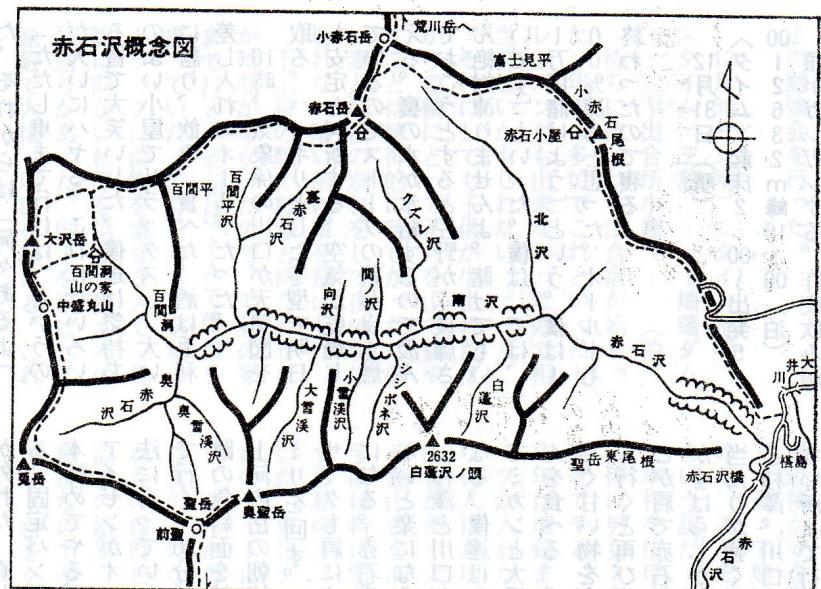
この東尾根は上

部より下部が鋭い尾根を形成している。従つて

山頂付近は平らでそれが聖岳の特徴でもある。

この辺りは昔は海で百間平、静高平など浸食された平らな所が多い。

時折突風が体を揺るがせる。暗いので足元が分からず緊張する。ここで1歩間違うと大変だ。昨年もいろいろの人が山で逝つた。ダウラギリに逝つた木暮、谷川に散つた今



野、K2に消えたニック・エスコート、皆一流の登山家だ。彼らはいつも思つていたに違いない。他の遭難を知つた時「・・・いか自分も・・・」との思いもあつたぶんいつも誰もそうなのだが、山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえること、山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえること、

山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえること、山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえること、山の絶対的な魅力の前に色あせてしまうのだろう。ただいえること、

やがて東尾根は最大級の傾斜となる。当初ここは雪が多いと最悪だとマークしていた所だがそうでもなかつた。迫力ある所なので杉澤、大橋にはもう一度降りてもらい8ミリを回す。後から僕、大橋、川口が続く。頂上はもうすぐなので氣分的に楽になつた。奥聖に登る

と風が当たつた。頂上手前の風のない所で大休止。朝、雲の多かった空もきれいに晴れ上がり、駿河湾の向こうに達磨山が見えた。数分後、待望の頂上に立つた。風が強く寒い。僕は冬の聖岳はこれで2度目だつた。下りは雪が多いと悪いが、今年は少なく楽だつた。ブラブラ下り聖平小屋着。時間が早かつたので空いていて11名分は確保出来た。佐野と荷上げ品を取

りに行く。荷物は完全だつた。毛利、杉澤は水を汲みがてら聖沢隊はいつも思つていたに違いない。交信時間なので呼びだすと、小川の元気の良い声が入る。全員元気で12時頃到着予定との報告。彼等の為にコンソメースープを作つて待つ。毛利が先程から落ち着きがないので「どうしたの?」と冷かす。「彼女を(坂牧)を迎えて行きたければ行つたら」と言うと「じゃー行つてくれる」と出かけた。

小屋の中はマイナス4度でジップしていると意外と寒かつた。結局聖沢隊は1時間遅れて13時に着いた。毛利も彼女?に会えてゴキゲン。我隊もこれで総勢11名となり、普段の活動のようにワイワイ、ガヤガヤ急に賑やかになつた。そして先程までの体験を報告し合つ。聖沢は思ったより雪が多く、大変だつたようだ。

坂牧、栗城が紅茶を入れてくれた。湯気が小屋の窓から差し込む西陽に光つていた。何という幸せな時だろう。毛利と竹端が寝てしている間、残り少ないウイスキーを飲んでしまい、毛利におこられてしまつた。調子に乗り過ぎたと反省。